１０月１７日

屋内スケート施設あり方検討委員会　説明資料

山形県スケート連盟

（１）競技・練習環境に係る現状やこれまでの状況について

＊フィギュアスケート競技について。（スライド３ページ目）

ヒルズサンピア屋内スケート場があった時には、選手・指導者は１０時のオープンから閉館までほぼ一日スケート場で過ごしていた。選手たちは練習し、普及部の指導員も一般の滑走者に楽しくかつ、安全に滑れるようにと声を掛けながら活動していた。

日本スケート連盟公認の施設でもあったので、毎年大会も行い東日本フィギュアスケート大会なども開催。閉鎖されてからは、県外に行っての練習となり、選手と保護者にとって時間と費用の負担がとても大きく、山形市内にあったクラブは解散してしまい、現在は庄内地区のみの活動となってしまった。庄内地区でもシーズンオフ中の練習や大会は公認のスケートリンクがある県外で行っている。しかし、コロナになってからの２年間は行動制限などがあり、それも中止となってしまうなど、活動を続けていくことが厳しい状況が続いている。

＊スピード競技について。（４ページ目）

スピードスケートでも、シーズンオフにヒルズサンピアの屋内スケート場はショートトラックの練習に利用。閉鎖後は主に高校生は県外に行って練習をしている。近年各種競技会が８月から始まるようになり、小中学生も７月になると毎週県外へ行って練習するなど、こちらも時間と費用の負担が大きくなっている状況。

スピードスケートの公式競技会は今のところ山形市の既存の施設で行えているが、毎年修繕をしており、いつ故障するかと不安を抱えながらの状況。日本スケート連盟主催の大会を開催できる県が減少傾向にあり、全日本の大会を誘致してほしいと中央競技団体からも言われている。これは、日本スケート連盟が考える競技人口拡大の観点から、地方の活性

化がねらい。

大きい大会を誘致することにより、また、スケート競技を知ってもらうことで普及にもつながり、競技人口を増やすきっかけにもつなげていけると考える。これは、スピード競技、フィギュア競技どちらにも言える。

５～８ページについて

当連盟は今後さらなる競技力向上を目指すうえで、連盟の組織体制、普及と強化について短期・中期・長期的に強化システムを確立させるべく取り組み始めている。

（２）屋内スケート施設があった場合の効果について（１０ページ目）

スケート連盟は選手強化育成・発掘・普及そして、老若男女問わず幅広い世代の方にも生涯スポーツであるスケートを楽しんでいただくためにも、400ｍの中に 30ｍ×60ｍを入れたダブルリンクにすることでより効果があると考える。

９月の議会において、奥山議員も言っておられたが、

山形市総合スポーツセンタースケート場の利用者はコロナ前は１１月末から翌年２月末までの 3 ヶ月間で 35,000 人を超え、多い日は 1 日で 1000 人を超える日もあったそうだ。

コロナになって１日の入場者を制限しても約 18,000 人の利用者がいて、毎日上限の約 600 人がスケートを楽しんだようだ。

この人数は、３０×６０リンクでは到底裁き切れない人数。

若者のスポーツ離れとも言われますが、毎年お正月や成人式には沢山の若者がスケート場に来て楽しそうに滑っている。

この屋外スケート場でもスケート教室や地域の子供会行事、小学校や高等学校の体育の授業が行われてきた。ただ屋外のため、降雨や降雪などの悪天候時は延期や中止なっていたことから、屋内スケート場で実施可能になることにより、計画的に進められると考える。

県民の幅広い年齢層がさまざまなスポーツと触れ合い、一流選手のパフォーマンスを間近に見られるような体験を通して、「スポーツをす

る・みる・支える・知る」ことでスポーツの多様なかかわり方ができ、競技スポーツにおいては競技力の向上に繋がり、生涯スポーツの生涯を通じ、いつでも・どこでも・誰とでも、スポーツに親しむ機会がさらに増えると考える。

（３）利用者確保について　（１２～１５ページ）

豪雪と猛暑の山形県には、このような屋内スポーツ施設があれば、幅広い年齢層の県民が気軽に運動できる場となる。冬季期間では、雪の影響で活動が制限されることなく、特に、記録を争う競技などは、年間を通して練習計画を立てやすくなる。夏季期間では、全国でも夏の最高気温が高い山形において、身体への負担を軽減しながらトレーニングに集中できます。近年、酷暑に耐え我慢してトレーニングをする時代から変化してきていると考える。リンク中地について。主に、ネット型やゴール型の競技。これは、北海道帯広市、青森県八戸市の施設の実績がある。（30×60 は資料の通り）会議室、ウェイトトレーニング施設、使用用途はスポーツに限らず、幅広い活用が可能。400m 外周は、トラックとして、ランニング、ウォーキングなどの活用ができ、屋外壁面にはボルダリングを設置することもできる。（海外のリンクには設置されているところもある。）トレーニングの進化もあり、幼少期、ジュニア期に様々なスポーツに触れ経験を積むことが注目されている。コンサート会場やイベント招致も可能。フィギュアにおいては、アイスショーも行うことができる。八戸では、ミュージシャンやお笑い芸人を招いての実績があり、帯広ではオリンピックメダリストやオリンピアンを講師として招き小中高を対象としたスピードスケート講習会も頻繁に行なっている。特に力を入れて行かなければならないところが、学校体育の部分。小中高生、各カテゴリーでのスケート教室を積極的に呼びかけ、スケートに触れる機会を増やすことで利用者の増大、競技人口拡大のきっかけにしたいと考える。通年で利用可能な施設となることで、雪国の課題でもある冬季期間の運動量確保にも繋がり、体力の向上や健康寿命を延ばす取り組みにもなると考える。

競技者向けにはなるが、本県には NTC 競技別強化拠点施設である蔵

王坊平アスリートヴィレッヂがある。ナショナルトレーニングセンターに指定されている高地トレーニング施設は全国に２ヶ所あり、そのうちの１つが本県である。年間を通して県内外から、高校生、大学生、社会人、プロ選手など、国内トップ、更には世界で活躍する多くのアスリートが利用。高地トレーニングで提唱されている、living-high、training-low を実践することが可能。実績としては、スピードスケートのナショナルチームは、菅平高原の高地に宿泊し、氷上トレーニングは低地である長野市に降りて行なっている。科学的な側面からも証明されているように、オリンピックでメダルを獲得するためにも必要な環境である。

複合型施設になることで、競技力向上を目指す選手たちやチームが山形に集まり、これまでよりも更に高いレベルを目指せることにも繋がる。

また、山形県には数多くの温泉があることから、スポーツと観光の融合など、多くの方に関心を持ってもらい、体験してもらえるような施設にしていくことで、効果は十分に上げていけるものと考える。